ヴァレリーの詩学

―言語の問題―

杉本秀太郎

1

思想的作品というものを、思想の歴史のどこに置いてみるのが、対象たる作品の理解にも、また更に、行為の類型の変容を（それが思想の最もいちじるしい結果であるからだが。）価値ずけするにも、有効で適切だろうか、このように問うことが、課題のきつかけとなるばあいがあり得る。そして、この問い方が、思想の親子関係（filiation）という考え方、切れ目の数が増すのでは成り立たなくなる概念と、対立しつづけるようならば、対象たる作品がよほど強力なのだ、という目やすとなり得る。ルソーの作品は、その一例となるものであろう。われわれが今日もなおその思想を活かすことができるかどうかを、期待を抱きつつ吟味したくなるような思想的作品には、一般に、この尺度が当てはまるように思える。

だが、問題として取り上げた作品が、われわれから時を隔てぬ時期に出現しているとともに、顕現された力を十分にもっているときというよりもむしろ、まだわれわれもその作品のあらわれた時期から、諸多のモーメントの動きから、外に脱し得ていないばあいには、思想の作者の力量とは、単に表現力量のみではなく、生活処理の力量も含めて、いいかえれば、時機があつて提起され時期があつて解決を企てられるような疑問形の貯えの力量を含めてのいわば総計であるから、ここでの客観的な評価というものが、しばしばただ単に投げやりなありきたりのイズム的分類に終らなければ、むしろそうした評価の拒否ということになるのは当然である。前者の例は与えられた衝撃から生じる一種の恐怖というもので説明できぬではない名誉といえない例であつて、ヴァレリー（一八七一～一九四五）ならば、アンテレクチュアリストという限定が当てられ、それが一通りには通用していた時期が相応に長かつたことを思い出さねばならない。ヴァレリーのベルグソンとの類似を指摘する批評もやはり安易な限定という意味で、同様な傾向を示していた。類似の方が、ちがいよりもはじめに目につくからだ。後の例、つまり、こうしたあわただしい評価を拒むという例には、なおふた通りがあるようにみえる。第一に、拒否という、判断を前提としているはずの内的な力の行使から、正当に、対象たる思想を思想の位置にそのまま残して

おくとき。第二に、評価を拒んでいるというみせかけのもとに、ただ idolâtrie であるにすぎないばあい。

私がここで、その一部分を中心に取り上げたい思想的作品は、科学といいい切れずとも少くとも一般化された知識のシステムを予想させる西欧的諸観念を、エクリヴァン研究の分野に用いようと試みるとき、われわれが出会うひとつのおそらくは特殊な状況を具象化している。作品が思想の表現という見方から重要であるとみられるばかりか、この作品の作者たるエクリヴァンが、現代の諸科学に対していわば faiblesse をもつており、なおかつ、個人的な強固な探究の方法をわきまえている、という風に限定してみた上で、私はヴァレリーの詩学に一二の私見を加えようと考える。

2

コレージュ・ド・フランスでの Cours de Poétique で、ヴァレリーは、詩学がもはや文学というジャンルの制定の掟の権威的な説明といつた性質ではひとびとの関心から、時空いずれにおいても遠くなつたことを前置きして、つぎのように述べている。「……芸術における権威の時代は、ひとびとがそれを歎くにしろ悦ぶにしろ、すでに遠い以前に終つている。〈詩学〉という語は、もはや窮屈な古くさい指図という観念しかほとんど喚起しないのである。それゆえ私は安んじてこの語を、生物学で hématopoiétique（血を作る）あるいは galactopoiétique（乳を作る）機能などいうばあいに使用されると同様に、ポイエチックとあえて発音はせずとも、語源的な語義においてふたたび取り上げてよい、と考えた。いずれにしろ、私が言い表わしたかつたのは、作るというごく簡単な概念である。」[1]

註1　Variété V. ed. Gallimard (1954) p.300

詩学という語にここで下されている定義そのものも、また定義のし方も、非常にヴァレリー的である。だれしも faire とは、たとえばどうすることかを、経験的によく知つている。材料についての少しの反省もなしに、毎日くり返している何らかの道具による実施が、何かを作つていないことにならないような例を見出すのはむつかしい。たしかに、作るという notion は簡単かもしれない。それはその結果が見つかるような行為の全過程を通じて刻々に réaliser されてゆくものを支配している法則に対して、われわれが与えるおおまかな名称であろうから。たとえば、木片を削つたり切り揃えたり組み合せたりすることで箱を作るとき、この行為は、解決できそうもない難題の端緒などどこにも含んでいないように見える。行為に専念している限り、われわれの反省は、事物を外在的に追求するわれわれを妨げに来ない。だからここで、この「簡単な概念」のなかには、生物学的、神経学的、心理学的な問題、統計力学的な問題さえもがぎつしり包まれている、というのは決して正しくない。反省の方法、メトドロジーを faire という行為に対置するばかりでなく、さらにこの対置した尺度を、われわれの方でいくらかは動かしてみるときはじめて、方法論に応じた対象の系列がわれわれの手に入るのであるから。ヴァレリーは先に引用した一節に見るように、ひとつの簡単な概念、したがつてヴァレリー的には、広く共通的に用いられても驚くにあたらぬ概念にまず注意を促すのであるが、語の語源的意味における、ポエチックという定義によつて、かれはすでに、作るという概念の分析が、有機的組織体を対象とする科学の

分野を時として侵すことになるだろうという予測を、提示していることになる。そして、上の引用文にすぐつづけて、何を作るばあいの行為がポエチック（詩学）のなかで扱われるかを述べて、かれはこういっている。「私がこれから扱おうとするこの作るということ poiein ということは、それが完了すれば何かの作品になるというような作るはたらきである。私はこのはたらきを、精神の作品と呼ばれるに小さわしい種類の作品に限定することになろう。つまり、精神が自家の用に供するために、自分に役立ちうる身体的なあらゆる手段をその目的に向つて使用しつつ作り出すことを欲する作品である。」（傍点は作者）

ことに oeuvre と呼ばれるものが、詩（ポエム）であることはいうまでもないが、「精神」という観念が、そしてさらに「身体的なあらゆる手段」という限定が、詩との関係においてわれわれの理解に届くには、ヴァレリーの言語論に一応の展望をもつことが必要となつてくる。かれの言語論の特徴といえば、言語の道具性と言語の不正確性とを、仮りにドクトリネールな言い方をしておけば、認識の美学的範疇において検討しながら、つねに反言語学的に記述することから、それは成り立つている。別様にいえば、ここでの言語の問題は美の認識というよりも、美なるものに包含されているような宇宙の認識の、窮極的な可能性を問うことと対応しているのである。

おそらく、ヴァレリーのひとつの偏見は、言語学者が、自己の専門的課題の範囲について、考えぶかい境界を設けねばならない根拠を、職業的良心、というよりもヴァレリー的には、職業的な用心ぶかさ（prudence）に帰してしまうところにあるのだが、この点にはふたたびのちに触れるとして、ひとつの学的体系のより高度な体系への接近を阻害するもの、あるいは、箇別的な諸体系の、より綜合的な新らしい秩序のもとでの更新を阻害するものは、いつでも公式主義的な考え方だ、ということを念頭に置いてみれば、ヴァレリーの記述のうちには、それが反言語学的であるという理由だけで原理的に無価値とは決していい切れないものが含まれている。

3

視覚的対象物を、陶酔において、選択の観念を少しも動かせることなく、現存するがままに知覚しようとするコンスタントな注意力、この芸術家的といつてよい vertu を物を変形する或る能力に、むしろヴァレリー的には「精神」という普遍的な変形の能力に結びつけ、これらを、あるべきレオナルドとイダンティフィエすることろみ、概略的な言い方をすれば、これがヴァレリーの処女論文「ダ・ヴィンチ方法序説」の意企である。まず私は、もう少し具体的にこの作品に触れねばならない。

思考の記述にかならずしも言語という道具を必要とせぬばかりか、言語よりも直覚的な、そして言語とは別種の抽象過程を経て記号となり得る表現手段であるフォルムの方に、思考の真の素材を置いている人間――本来的に言語に軽侮を抱いていてもよい、と思える人間を、どこかに、というのは人間の可能な型のいずれかに想定すること。ヴァレリーの思想のはじまりはおそらくそこにあつた。もしもフォルムが、思考を表現するための条件に欠くところがないとすれば、そうしたフォルムは、フォルムのフォルムとなる外はない。この二重の関係を重視するところから、事物を単純化し、つねに感覚上の過剰から何物かを除去するところにその機能が認められる知性を、視覚の裸の状態と対比し、前者を認識の退嬰的な一手段

にすぎぬと見做す思想が生れる。ヴァレリーは、言語の散文的な使用法を、知性の専売だと考える。そして、散文的という概念を、かれはただちに、日常的な実用的なという概念と、区別することなしに、そしてそこに保留をまったく設けることなしに用いる方に傾く。レオナルドの一家言として有名な saper vedere（見るを知る）のためには、言語の特殊な用い方が避けられない、とおそらくかれは考える。言語学者の言い方を借りれば、かれが用い得る言語はたとえどんな用い方をするにしてもやはり「ノルム」であることをやめるわけではない。[1] それゆえに、言語の特殊な用い方とは、ヴァレリー的には、知覚の全体を intellect による抹消を免かれたところで、actif な、内から外にと向うような内的な能力のはたらきによつて、言語―ノルムの上に投射することを意味する。

註1　cf. Hans Sørensen : La Poésie de Paul Valery, Etude stylistique sur la Jeune Parque (Kjøbenhavn, 1944) pp.21-22

「大部分のひとびとは目で見るよりもはるかにしばしば知性で実在の物を見ている。色彩のある空間があるばかりのところに、かれらは概念を識別する。白つぼくて、高さをそなえており、ガラスの反射が穴をうがつている一箇の立方体は、かれらにとつては、ただちに「イェ」なのだ。イェ！複雑な観念よ、抽象的諸性質の調整よ。かれらが位置を変えれば、窓の並びが運動するし、かれらの感情を継続的にゆがめながら、表面が並進運動をつずける。だがかれらは、こうした運動を取り逃す。なぜなら、概念は変らぬからである。かれらは自分の網膜にもとずいてよりもむしろ、辞書によつて知覚しているのである。［……］かれらは、呼び方を欠いているものを、無価値として投げ返すから、かれらの印象の数は前もつて厳密に定められていることになる。」

「ダ・ヴィンチ方法序説」のこの一節が表明している観念は、知覚作用そのものとの関係が間接的にされてしまつては目的に反するような何らかの記述方法が、発見されねばならない必然性を予想させる。[1] その方法を用いることによつて、ひとは、実在の世界の無秩序から逃れるであろうし、しかも同時に、概念の系列と対応する抽象の系列（あるいはその逆の対応関係）からも自由となり、或る軽侮をそれに対して抱いてよい権利を得るであろう。その記述方法を介することによつて、「知つているより以上の多くのものを見る」（ヴァレリー）ことと見たものを知ることとが、思想の表現という認識の一般化のなかで共有的な一点として少くともひとつの頂点を持ちうるにちがいない。だが、この問題はここにして論議をかもす契機を、ひとつならず含んでいる、といわねばならない。

1　Variété, Gallimard, 1924 pp.237-238

われわれは、あえていえば、メタフィジックの課題の拡がりをさえヴァレリーのこれらのページのなかに想定したくなる。ライプニッツが、書かれ描かれあるいは刻まれた符号のすべてに caractère（記号）という名称をあたえたときに、同時にかれが caractère/reel（実記号）という名称をもつて、事物や観念を表象する符号にあたえたこの限定が、言語という象徴形式の一体系の攻究への最初の確実な第一歩であつたことを想起するならば、思想の歴史を対象とした、或る当然な推理の方式が、すでに活気を帯び、ひとつの誘惑といつてよいほどに、われわれにその利用を迫つてくるのが感じられ

る。げれども、「ダ・ヴィンチ方法序説」の記述を更に追いながら、先んじた哲学者たちや、もしくは現今のわれわれには十九世紀後半のひとつの切れ目に生れたヴァレリーよりも接近した位置を占めているような、象徴体系の研究に貢献した哲学者たちが、提出した課題の再現を、この作品のなかに見出そうとする工夫は控え目にしておこう。érudition に対するヴァレリーの終生の無関心を、ここで言つてみてもはじまらないのだ。ただこの個体的な認識の努力のいわば contre-érudition 性は、結果論的な言い方をすれば、かれがあらゆる言語のなかでただふたつのものを、figure（形象）という言語と、数学的言語のふたつを、記述の道具として特に重視するにいたつた、というそのことによつて、われわれの検討に価するのである。「他は文学にすぎず」と、ヴァレリーはいつたであろう。十分注意していなければならないが、形象という言語は、対応という観念（ここでは詳述し得ないが、ボードレール的な神秘も、マラルメ的な宇宙概念も暗示しないものと見られる。）をréaliser するべき詩の素材であり、数学的言語は、MOI·PUR．というヴァレリー的発明を表象する記号的役割において、それは言語なのである。この言語的処置は、「ダ・ヴィンチ方法序説」を書くことによつて、当時二十三才のヴァレリーがほぼ確実に捉えた manière de penser の核心であり、したがつてまたこの処置は、ヴァレリー的詩学全体に特色というよりもむしろ偏向をあたえることになる内的な、あるいは潜勢的なといつてよい主たる動機である。偏向といい、潜勢的といつたのは、言語的処置にもとずく偏向と、同一の人間のうちで数十年のへだてを取つて効果をあらわすような言語的処置なるものは、おそらく思想というものの自己証明であろう、と思えるからである。しかしこれは別箇の課題となるべきであろう。なぜなら、思想と文体との関係が解明されねばならず、そしてこの関係が明るみに出るには、音節的言語という象徴体系に個有な諸事象を広範囲に探索する仕事が必要となるはずだから。

4

そこでもう一度「ダ・ヴィンチ方法序説」のページに戻ろう。そうすれば、形象を偏愛するエタ・ダームのあることを、われわれは知らされずにすまなくなる。生の或る特選の瞬間には、もしこう言えるとすれば、外的実在の世界と人間のミクロコスモスとのあいだの、共通的要素となつて躍動する形象の場として再認されるエタ・ダームを、この著者が、いかに分析し評価し、同時に、対象たるエタ・ダームを描写さえしているか。（書くという一連続の行為のうちに、こうした散文的力量の同時成立があり得るフランス語というものに、われわれは羨望を禁じ得なくなる。相次ぐパラグラフを充たす分析と評価と描写とは、もしこれらを総称するとすれば、pensée という名があるより外に、私としては思い当るべき語がない。それ故に――）ここで本文をくわしく吟味する余地もなく、またそれは不可能であると思われるから、特に見逃せぬ若干の観念のみを、こころみに取り出してみようと思う。

事物の静観（contemplation）は、思考の持続によるところの形から運動へのアバランスの変化を伴うとき、それはかならず陶酔を誘わずにおかない。形から運動へのこの変化は、ただ単に対象の運動そのものの結果であるばあいが通常だが、時には「視覚の持続および疲労」が網膜に生じさせる身体的な、それゆえデカルト的意味に

おいて passif な変化に起因しているばあいもある。しかし、この区別は実際にはたしかめにくく、いずれのばあいにしても、視覚域の一部分に、対象の特質を誇張する能力がそのとき生じているのだと考えておいた方がよい。こうして、「或るイマージュが他のイマージュを予知することがあり得る。intuition とは、語源的には、狭義には、ヴィジオンなのだから」と後年の欄外自註には書かれる。静観の対象として選ばれた事物、特別扱いにされた事物は、ポーが同一化の能力（qualité d'identification）と称した想像的思惟の一性質にめぐまれたひとを、夢と覚醒の交互的誘発の状態に置きざりにすることがある。しかし、諸対象それぞれのユニーク性を、視覚の集中的使用によつて受けとめることを愛するからこそ、そのひとは静観を好むのであれば、同一化の能力は、かれのうちで individualité des objets に対する強い注意力と重なり合つていることになる。「選ばれた対象は、想像的生活の中心たるその対象の複雑性の多少に応じて、ますます多数の聯想（association）の中心となる。」[1]

ヴァレリーの詩学が、たとえば「コローをめぐつて」と題された絵画論をひとつの代表作と見做してよい諸芸術論の理論的母体であるとすれば、今、ごく不十分ながら摘出したこれらの観念あるいは着想は、（四ページに足りぬ原文が具体的な観察をいつでも伴なつていることはいうまでもないが、）かれの詩学の、芽ばえの時期のいかにも早い protophite だと考えることができるように思う。ここでの叙述は、詩学の全体のなかでは、états de poésie（詩に感応されやすいエタ）についての記述に、したがつてまた思想に、呼応するものである。「詩と抽象的思考」のなかに、エタ・ド・ポエジーを定義してヴァレリーは書いている。

「詩（poésie）は、言語の一技術である。ことば（parole）の或る種の組み合せは、他の組み合せでは産み出されない情緒を産出することができる。そして、その情緒をわれわれは詩的と呼んでいるわけだが、かかる情緒とは一体どんなものなのか。

この情緒は、私のなかでは、つぎのような性格によつて識別される。すなわち、外的にしろ内的にしろ通常の世界というものに存し得る諸対象のすべてが――存在、事件、感情、行為のすべてが――それらのアパランスに関してはつねのようでありながら、定義のしようのないような或る関連性のもとに、しかも、われわれの特定でない感受性（notre sensibilité générale）には思いがけないほど適当な或る関連性のもとに、突如として嗅かれている、というかような性格によつて。つまり、あの既知の事物や存在が――というよりそれらを表象する諸観念が、というべきだが――いわば価値を変えるのだ。かれらはお互いを呼び合い、通常とはまつたくちがつたやり方でお互いに近ずき合う。かれらはあえていえば音楽化（musicalisé）されているのである。互いに他と共鳴し、対応し合つて諧和を作るような状態にあるのだ。[2]」

註1　Variété, pp.239(de la deuxième paragraphe) 244 (jusqu' au ligne 7)

2　《Poésie et Pensée abstraite》 dans Variété V, p.137

このエタにおいては、それならば、空間を占める事物の形の上に、視覚的には、何らかの根本的な変容が生じる。心的エネルギーの高揚から、視覚のなかにも緊張が生じるが、空間を分割的に見るひとつのマニエールは、また逆に、心的波動のレアクションを受

け、対象物のイマージュの振動、諸対象のあいだの周期的な連続的なイマージュの交代を許すようになる。この視覚的対象の上に起る現象の言語的表現には、通常の言語活動とはめだつて異る部分が介入しているにちがいない。それは、形象によつて思考するという方式、ひとつのプリミティーフな抽象活動を言語のなかで、言語を通じて、実施することの帰結的部分であり、メタフォールは、こうして発想の中心を占める。[1]

註1　cf. Langer, Susanne K.: Philosophy in a New Key(Mentor Book, 1948) Chapter 5《Langnage》(et surtout p.114)

後にも蝕れるように、すべての形象は、精神という形象の脈絡のなかでしか、表出的などんな役目も果し得ない。だが、ヴァレリーの注意力、かれが、ソクラテス、[1]レオナルド、デカルト、[2]ゲーテ[3]のうちに見出し、称讃する能力、視覚的対象物から何物をも抹消することなしに、静観の陶酔において、対象をあるがままに認識するという能力が、みずから用い得る表現手段のうち（レオナルドの素描のように、線条と形を駆使するばあいもあるから）言語的象徴を介してなし得るおそらく唯一の手段は、形象そのものの性質のなかにあると思われる。形象の多用は、外的世界と精神との関係を表象するための言語的処置である。散文が、メタフォールの連続的な、重なり合つた使用に耐えるものでないこと、形象そのものの内部に起きる分化や共感が、分析的記述の方向ずけ、思考の orientation には、単なる論理的処方よりも有効ではあつても、それが顕在することは推理・論証的（discursive）な言語の相とは対立するから、散文記述には不適当なこと、などは、ここでは自明として見すごしておきたい。

註1　cf. Eupalinos ou L'Architecte
2　cf.《Fragment d'un Descartes》et《Le Retour de Hollande》dans Variété II.
3　cf.《Discours en l'Honneur de Goethe》dans Variété III.

一方、エタ・ド・ポェジーのうちには accidentel な心的産物、もつと正確にいえば心身的産物が、音節的言語の形のもとで、発生する機会が認められる。ヴァレリーは、この産物を、退嬰的な意味では決してなく、その後の意企されて作られた詩句との対比のみによつて、vers donné（あたえられた詩句）と名ずけている。反省の前には、そのとき、音節的言語の推理的性質の固定によつてでき上つた言語の約定的な体系よりも先に、音韻要素の意味をほとんど欠いた連続があらわれる。それは、意味表示的でなく、情緒表出的なつぶやきであり、伝達的な脈絡から離れて浮かび上り、内的生の脈絡のいくらかを反映し担つているような、語の「音楽化された」系統である。このような語の一連の形成が、メタフォールによる発想を容易によること――これには関心を払つていなければならない。ただしかし、この音節化という観点のみから、メタフォールの形成を演繹できるのではない、という前置きは必要である。たとえば、サピアのつぎの記述を記憶に留めていることは必要である。「言語起源は、言語学諸分野の資料のみをもつて解決できるような問題ではなく、おそらく、これは本質的に、象徴行為（symfolic behavior）の発生というはるかに広大な問題のひとつの特殊なケースであり、喉頭部における象徴過程の特殊化という問題である。ただし

喉頭部が、当初からただ単に、或る表現的機能のみを有していたのだと仮定できるものとして。[1]」この最後の仮定が検証的に成り立つ上でなくては音象徴とメタフォリックな言語形態とを直結できない。（メタフォールが言語起源の研究に占める部分の拡がりについて触れるだけの力はもとより私にない。）

註1　Encyclopedia of Social Science (Macmillan Company) : article《Language》by Edward Sapir

5

ところで、われわれはつぎのように考えてみよう。詩的なエタ・ダームの、決して長時間ではないそのあいだ、知覚され、さらに陶酔によつて強められた対象＝事物の占める空間を、われわれにとつて理解し得る表出し得るようなものに変える唯一の把握の形式として、形象というものを限定してみよう。このことは、形象を象徴的言語と見做すことであり、またあえていえば、形象化の内的能力を、symbol-using の非推理、論証的な思考への寄与という面から客観的に検討できる可能性を開くことである。もしも、ヴァレリーの、つぎの一節が（私は「ダ・ヴィンチ方法序説」からもう一度引用するのだが）[1]アナロジーなるものを積極的に肯定する思想として恒久的に著者の関心を惑き、注意力の中心に置かれつずけたとすれば、われわれは、この可能性の延長上に、いわば実体的証人として、ヴァレリーを持つたかもしれないのである。だが、アナロジーの価値は否定されている。「アナロジーとは、厳密にいえば、ただイマージュを変えたり結びつけたり、或るイマージュの一部分を他のイマージュの一部分と共存させたりすること、そして、意識的にしろそうでないにしろ、イマージュの構造の関係を知覚することにすぎない。そしてこのことが、イマージュの場たる精神を描写できないものにしてしまう。ことば（parole）は、そこ、精神のうちでは個有の力を失う。そこでは、ことばはおのずと作られ、精神の眼前に迸り出る。精神の方が、われわれに語（mot）を描出する。」

註1　op. cit. p.230

すべてのイマージュの意味は、精神というイマージュの脈絡のなかでしか成り立たない。しかも、精神というこの脈絡を、直接的に描写するようないかなる手段も、われわれには欠けている。このふたつの認識の帰結は、ヴァレリーの思想のいたるところに見出せるあの価値判断の暫定性であり、定義のあの不安定性である。ヴァレリーの精神という観念は、ある意味では、不安定性と暫定性との副次的な置換物だ、というべきかもしれない。定義を絶えまなく逃れてゆくもの、描写による限定からつねに免かれているものを、一般化された個別性たる知性の本来的な行為、事物を限定し定義するという行為のはじめに設けておくこと、これがヴァレリー的仮説である。仮りにランガーの記述を用いれば、[1]「代数的文字は、純粋シンボルであり、われわれは数の関係を、代数的文字のなかにではなく、それを通して捉える。この文字は、言語というものが持ち得る最高度の透明性をもつている。」精神なるものは・MOI・PUR＝0という数学的言語を介して、[2]裸の記号というべき状態でしか表現されない。0（ゼロ）はあらゆる数を等価しながら、自身はつねに不変なのである。

しかしながら、精神のヴァレリー的観念は、一方において、偶然的なすべての事象に対して能動的であると同時に受動的、と限定された人間的存在に対応している。能動的であること、思考の本性であり受動的なのは身体の本性である。詩学のヴァレリー的あり方を理解するには、このことを想起しなければならないばあいがある。

詩の言語が、形象的表現を得るとしても、そしてまた形象が、語から離れて内的ヴィジョンの外在化を遂げるにしても、詩の素材はいつでも単に音節的言語であるから、詩作品が、その素材の音声的単位である音の分布によつて、形象の脈絡—精神を描写するというばあいはあり得ないであろうか。この仮定が、ヴァレリーによつて着想された、というのではない。しかし、こんなばあいが、まれな度合いにしろ起り得るとしたならば、その度合いを確保するのみか増大させようと努めることは、たしかにヴァレリー的な工夫である。「心的偶然が（ともかくもしでかす何らかの無数の仕業のなかで）われわれに引き渡すところの、興味あるもしくは利用できそうな結果に類似した或る結果を今度は、意識の意志をもつて見出そうとこころみること」[1]。とはいえ、音節的言語の音的要素の配列が、形象や言語の彼述的性質によつて、かならず掩いかくしてしまうような脈絡——どんな形でにしろ外的実在世界の把握が企てられればそのとき把握された実在の意味が、そこでしか成り立たないような言語の脈絡を、直接的に表象することがあり得る、というこの仮定を、ここで十分に用いるには、条件が要るのである。すなわち、音というものが、言語象徴や造型的な芸術象徴とはまつたく別系統の象徴形式を許すことを確かめねばならない。そしてこの象徴形式が、一般に表出的な機能を象徴に持たせるところの、象徴とその対象とのあいだのあの距離をこえたところに、いいかえればわれわれの聴覚器官に外接し、発音器官と内接したところに、その領域を占めていることを確かめねばならない。（以上の二点については、ランガーの前掲書の第八章「音楽の意味について」を読まれたい。）音による表象という言い方から標題音楽を想起してはならない。音が、しかも自然的騒音でも楽音でもなくして音声的な音であるならば、たとえその音が何ものかを表象すると予想されるときにも、われわれは、その音の背後に新たな脈絡を想定する義務を免かれる、という考えが、今言つた二点の確認と同時に導き出される。なぜなら、このとき音声上の単なる要素にすぎない音は、対応する事物の意味というものから離脱しているからである。したがつてもしも音声によつて表出（express）されているものがあるとすれば、それは認識のいかなる対象でもなく、ただ発声によつて生物学的諸機構のなかで消費される身体的エネルギーが借りた音節的言語の音的要素の若干にすぎない。[2] そしてこのエネルギーの発出（émission）が、高度な形態的発達をすでに終えている言語、高度の抽象用途に耐えるだけの文法的構造をもつた言語のなかから、わずかの語を択び出し、音声化するというばあいを考えると、こうしてあらわれた語音のつらなりが、ヴァレリー的認識にとつては、決して着過できない言語的処置、さらに今ひとつの言語的処置にかぞえられるといえるのではなかろう

註1　op. cit. p.194
2　cf. Valéry : Lettres à Quelques-Uns, Gallimard, 1952. pp. 245–246 Lettre à Rideau, da tée de 1943

か。言語的素材を、ひとまず意味からまつたく分離した上で、音のみの秩序、ただしヴァレリーのきわめて個人的な偏好にもとずいて択ばれたような音の配列を、ひとつながりの語から他のひとつながりの語へと求めてゆき、そして音と音とのエコーに快楽をかれが感じる限り、そこには、ヴァレリー的語義における精神の直接的な象徴化(symbol-making)が成立しているのではあるまいか。それは、快楽のみがその達成の唯一の証明であるような表現の形式なのだが。

註1 《Fragments des Mémoires d'un Poème》 dans Variété V, p.102

2 cf. VariétéV. pp.139-141.
cf. Bronislaw Malinowski : The Problem of Meaning in Primitive Languages (Supplement (I) of《Meaning of Meaning》 by Ogden & Richards (Kegan Paul, 1923) 殊にその第五章。

3 これをヴァレリー「詩集」のなかから取り出すのは大へん容易であるが、取り出した例証が少いと私の恣意的な選択と思われるかもしれない。くわしくはギローの書を見られたい。
Pierre Guiraud : Langage et Versification d'après l'Œuvre de Paul Valéry (Ed. C. Klincksieck, Paris, 1953)

ヴァレリーは、白紙の上に vers donné のいく行かをまず記入しついで脚韻語だけを(ばあいによれば頭韻語も)縦に並べて紙の右側に書きつけておき、あとは、数箇月、数年にわたる長時日の摸索をこの紙に当てて余白を埋めてゆく、というやり方で、「ジュヌ・パルク」の長詩を作つていつた。われわれを驚かせるかような制作法は、ヴァレリー的な精神の観念なくしては考えられないことである。

註1 パリ国立図書館におけるヴァレリー文献展示会の目録書には、「ジェヌ・パルク」の最初の部分の原稿の写真が見られる。また、この展示会を在仏中に見た大橋保夫氏からも示唆を受けた。
cf. Billiothèque National : Paul Valéry (Paris, 1956) Pl. VII. Ebauche autographe de la《Jeune Parque》

ヴァレリーは、よく知られているように、青年期にかなりの数のソネットその他の詩作品を作つたのち、十数年のあいだ、一九一二年頃まで、公的な文学活動につながる創作を、韻文芸術の範囲には作り加えずに過した。抽象的問題の個人的方法による攻究者と数学のアマチュア、これがその「沈黙」の期間のヴァレリーである。昔の詩作品に改良のペンを取る機会があつてから、かれはふたたび詩の方に立ちかえり「ジュヌ・パルク」製作に専念し、その後相次いで「シャルム」の諸篇を書いたのである。だが、これは、かれが物を書くことを正当化するにいたつたという証拠にならない。詩がなぜ例外となるのか、これを説明するもののひとつに、ヴァレリー的なこの精神という観念がある、という自明と思われそうな点を、われわれはやや立ち入つて検討できたように思う。結論的なひとつの補足として、ここで少し大胆に言えることは、近代詩人たちを見舞うのがつねであるところの、あの言語の危機なるものは、ヴァレリーを見舞いはしなかつた、という指摘である。かれの詩人的「沈黙」とは、偶像崇拝には許されていても、真の宗教には無価値なる神話にすぎない。言語の危機がその沈黙の動機であるようには、かれは言語を扱つていない。

6

ヴァレリーの詩学が、エタ・ド・ポエジーをめぐる分析と決して明瞭に分離できないような形で「構成」という概念を捉えていることは、だれでも気がつく。いうまでもないが、構成という語は、歴史を内容とするヴォルテール風な詩には欠かせない筋書の発明というものを、ここでは少しも表現していない。かれは、たとえばこう書いている。「まつたくのところ、一篇の詩は、語を用いて詩的状態を生産する一種の機械である。この機械の効果は不確実だ。というのは、（多くの読者という）多くの精神たちに対するはたらきかけに事がかかわる以上、何物も確かではないから。だが、結果ならびに不正確さがどうであろうと、機械の構成は多くの難問の解決を要求するものである。[1]」構成するとは、ノンブルと音韻、シラブル、詩節、音と語義との応和関係、などを実作において刻々に解決するという忍耐ぶかい行為の全体を指している。作品が芸術の証しとなるのは、ヴァレリーにあつても少しも変りはない。いやそれどころか、かれはこの点で、おそらくどんな詩人よりも自己にきびしかつたことを忘れてはなるまい。しかしながら、認識の問題としては、いいかえれば、「事物や関係についてのわれわれのあらゆる経験に対する記号の目録」[2]（サピア）の整備されていることを前提とする抽象的把握の、二重の応用分野においては、ヴァレリーは、construction よりも formation（形成）という活動の方に、一層強い関心を抱いていたように思える。このふたつの概念にかけられた比重のちがいから、つぎのような極端な spéculation が導き出されるのだと知つていることは、ヴァレリーを読むわれわれの側の用心である。

「ところでさて、哲学者なるものは、ひとたび認識を、確立もしくは独創し、証明もしくは軽々に見すごすかしてしまつたあとでは、たとえかれが自分のその認識を、論理的もしくは直観的な、強力な言語的結合によつて、自己の力以上に高揚しているにせよ、発展させているにせよ、または、認識を、批判力によつて調整し、あるいは認識自体にまで引き戻しているにせよ、哲学者なるものは、あい変らず、人間活動を一般的に説明しようとする仕事に誘惑を感じているものだ。説明するとは、いいかえれば、理解というものの自分一箇人の秩序にほかならない自分の体系において表現することなのだが。しかるに、人間活動の知的認識とは、たとえそれが人間活動の全体を敍述しているにしたところで、つまりは人間活動の様相（modalité）のひとつのばあいたるにとどまつている。[3]」

形成とは、均質な各部分が一定の調和のもとに置かれているような、閉ざされた物、ヴァレリーのことばを引けば、「固有の密度をそなえた物体」、たとえば、樹皮や花びらや貝殻のような物体を、結果的に作り上げるような自然的な、あえていえば神秘な活動である。この小論では、構成という概念には、少しも論及せぬままにしておきたい。

註 1　Variété V, p.159

2　Ebward Sapir : Language–An Introduction to the study of speech (Harcourt, Brace and Company, 1921) p.22

3　《Léonard er les Philosophes》 dans Variété III. p.140.

附記

1

ヴァレリーの詩学的思想を、文化史的に系統ずけるということろみは、私の読んだかぎりで、マルセル・レーモンに見られただけである。「ヴァレリーと精神の誘惑」と題された著書の一章「詩学展望」のはじめの一ページに、レーモンはつぎのように述べている。（この展望は、粗描のみにとどまっているが、英詩についてのハーバート・リードの見解と同様に、私に多くを教えた。）

Marcel Raymond : Paul Valéry et la Tentation de l'Esprit (Ed. A La Baconnière, Suisse, 1946) Chapitre ≪Vues sur la Poétique≫

cf. Herbert Read : Phases of English Poetry (Hogarth Press, 1928)

「フランス詩のボードレール以後の展開全体は、純粋詩的なるもの（le poétique pur）という、精神の一カテゴリーに照して批判できる。この純粋詩的なるものというカテゴリーは、近年にいたつて成立したものであり、人間精神がその歴史の或る特異な瞬間において手に入れたものを表象している。（この点については、ジャック・マリタンが「詩の位置」で提した指摘をあらためて再読しなければならないが。）

人間は、まず初めには、自己の諸活動力および自己自身を、漠然と意識しながら、ひとつの全体的な生活を営んでいた。つまり、かれの諸活動力は、かれの目には無差別なままに留つていたということを承認しておけば、この精神的発展過程は、一番都合よく説明される。かかる段階について、人間の諸活動力は、長い時間が経つにつれて徐々に分裂し、互いに区別され、ついに人間は自己を自身から引き離し自己と自己自身とを対立させるにいたる。ここにいたつて、いかなる運動もかならず逆行を誘発する。ヴァレリーが極度の鋭さで知覚したように。

詩的感情（今日のわれわれがこう呼んでいるもの）は、大昔には、存在の或る一般的感情のうちに完全に拡散し、この感情のいたるところに稀薄な濃度で拡げられていたのであり、最も濃度のある部分におけるこの sentiment générale d'existence は「聖なるもの」という観念に対応していたのだ、と考えられる。かような感情は、レヴィ・ブリュルが「超自然的なものの感情的カテゴリー」（la catégoire affective du surnaturel）と名ずけたものと関連していたのだ、と考えられる。知的意識の、十六世紀より十九世紀にわたつての深化の結果、また、人間がそこで実在の事物とそしてさらに自己自身と接触する機会を失つてしまつたところの機械文明における技術の進歩の結果、自己閉鎖的となり、心理的なものの内部に孤立してしまつたこの詩的という感情は、何らかの特権的瞬間における意識に対して、この感情みずからを、個有の性格をもつたひとつの経験として強課するにいたつたのである。このとき詩的というこの感情は、純粋でない陶酔、「未開人」の陶酔にではなくして、もつと高級な、次第に均質化されてゆくような陶酔に属している。」

2

ヴァレリーの分析的記述が、精神という機能、描写され得ずしてしかも活動して言語を促すもの、不在にして同時に現存するものから、分析のプロセスを抽き出すかぎり、かれの記述がいつ

でも「問題の解決よりは提出」という方向を逸脱することは決してないのである。しかも提出された問題は、提出の仕方そのもの、分析のプロセスそのもののこの反体系性によつて、方法論に支えられているあらゆる科学、文化科学のすべてと対立せざるを得ない。マルク・ブロックは、歴史学に対するヴァレリー的嘲笑を、歴史学というものについての時代おくれな常識にもとずく思い着きのみからなされた無価値な非難だと、正当に反論したことがある。[2] 同じ反論がなされてよい学科は、ひとつならず見出されるはずである。

自分一箇人のメトードに信頼して、問題の安易な解決を少しも求めない態度からは学ばねばならないが、問題の提出をくり返すのみの過程の連続が、精神の存在証明あるいは不在証明によつて正当化されるようなところには、偏見が生れる。そして偏見が、格調ある声で語ることもまれとはしない。

私はここで、ヴァレリーの幼児について理解は、浅薄というほかない局面を見せていることを、あえて指摘しておきたい。

児童は、歩行と言語というふたつのタイプの行為を習得する、と「詩と抽象的思考」の一節にかれは書いている、しかも格調ある文体で。[3] 《……cet enfant que nous avons été……》だが歩行は、厳密には習得行為ではなく、筋肉組織、神経系の適応の例証である。歩行は、サピアのことばを借れば「人間に個有な生物学的機能」という定義で限定されるに十分な行動のタイプである。ダンスはどうか。協同的な作業、集団内でのエネルギー発散を動機に数える模倣的な相互伝達の行動という観点によらずして、歩行と同一の身体的機構で成り立つダンスの発生を説明することは誤りなのだ。したがつてヴァレリーの常套の比喩、歩行と散文、ダンスと詩というこの対比を、児童においてたしかめるような表現は、ここでは何ものも描き得ない。

言語の習得性に関する研究は、周知のように、児童を対象にますます拡大され、新らしい常識を育てつつある。もしも思想の運命ということが言い得るとすれば、ヴァレリーの思想は、ここで、空白のまま残る部分を、自己発展的には、ついに補うことができない。かれはそこに、深淵を見ずにすぎたからである。

註1 《De l'Enseignement de la Poétique au Collège de France》 dans Variété V. p.291

3 マルク・ブロック「歴史のための弁明」(讃井鉄男訳・岩波)

3 Variété V. pp.148-149